

セブンリベラルアーツとはどこから来た何ものか

半田 智久

はじめに

本論文の目的はリベラルアーツとは何かという意味を尋ねたときに、しばしば登場する¹セブンリベラルアーツ、自由七科なるものの、その妙に明確に科目設定されているこの概念の不思議さに関心を寄せ、その成り立ちと盛期の姿を再確認することにある。

リベラルアーツ発祥の大本をたずねれば、これはピュタゴラスからつながる古代ギリシアの自由人の知にまで遡ることになる²。自由人の知は知を愛し求める者たちの営みであったが、その具体的な課程は文芸、体育、修辞、弁証などを加えながら、ヘレニズム期にエンキュクリオス・パイディア (enkuklios paideia)³と称される全人教育的な学環として広まった。時代の中軸がローマへと移るなかで、ホセイドニオス (Posidonius: B.C.135-51) に代表されるストア派の学者などを中心にした貢献によってギリシア的なものはラテン的なものへと転換していった。リベラルアーツ (liberal arts) という名称はその道程においてローマ共和政期の学者たちが語り出したラテン語 (artes liberales) を始まりとする。だから、少なくともことばで表現された概念としてのリベラルアーツの発祥ということになれば、それは今からおよそ21世紀前の当事者、キケロ (M.T.Cicero: B.C.106-43) やヴァロ (M.T.Varro: B.C.116-27) に定めおくことができる。

たとえば、キケロはその著作のなかでリベラルアーツの原語ともいべき artes, quae sunt libero dignae (自由人にふさわしい諸学芸) とか doctrina liberalis (自由学問) といった表現なども用いながら、心の涵養と徳の形成に欠かせない学芸の重要性を繰り返し指摘している。そこで語られた科目は弁論、弁証、文法⁴、音楽、幾何、天文などであったから、まさにその総称はエンキュクリオス・パイディアのラテン表現に他ならなかった。

彼と同時代に生きたローマ最大の学者といわれるヴァロは、およそ90年に及ぶ生涯に言語、宗教、神話、詩作など広範囲にわたり150ともいわれる書き物を残したといわれる人物である。その著作“Disciplinarum libri IX (Nine Books of Disciplines)”においてやはりリベラルアーツに触れていたという。残念なことに同書は現存しておらず確認できないが、そのなかでは自由学科として医術や建築も加えられていたようである⁵。これはその後の経緯からすれば、十分にありえたことである。こんにち残っているヴァロのことばの断片を探ると、たとえば「ディナーへの招待客はカリス (Graces) の数以上、ムーサ (Muses) の数以内にかぎる⁶」という句を見つけることができる。これは美の3女神と学問・芸術の9女神の比喩を用いて、楽しい晚餐を催す際の適正な人数について語っているのだが、この数にリベラルアーツの科目数が重ね描きされているとみることもできる⁷。

やはり同時代に活躍した建築家ウィトルウィウス (Vitruvius) は建築家が同時に学ぶ必要のある学科目として、文法、絵画、幾何、算術、歴史、哲学 (アルキメデスなどを例に、導水に際して必要になる自然学を含んだ哲学)、音楽 (たとえば、すぐれた劇場をつくるために。また、戦争時の投石器をつくるの

にその弦の張り方には弦楽器の製作法が応用されていたなどの点で)、医術(健康な空気、土地、水を利用するために)、法律(建築主との契約にあたって)、天文学(諸星の運行と季節の変化を知ることによって建築に必要な方位が理解でき、また当時は建造物としてあった時計もつくることができた)をあげている。彼の場合、よき建築家にとって学ぶ必要のある学問という観点で述べているので多様な学が入ってきている。そしてこう述べるのである。「建築の学問は多岐多数の知識で修飾され豊富にされているので、子供の時からこれらの学問の階段を登って文学や技術の膨大な知識に養われ、建築の至高の聖域に到達するのでなければ、急に正当に建築家の職に就くことは不可能だとわたくしは考える⁸」。

総合的な知の錬成こそがローマ帝国の象徴でもあった巨大建築の実現を可能にしたということは素直に納得できる。同時に、このことから紀元前1世紀のローマに生まれたリベラルアーツは、帝国の繁栄とともにあった自由さを象徴するもので、工芸、美術など広範な芸術はもちろん、建築、土木。医術、法賢慮といった実学を含んだ総合学術としてあったことがみえてくる⁹。また、その総合性の協和こそはローマ繁栄の礎であったパクス・コンソルティス(Pax Consortis)のあらわれであり、そうした性格をもった誕生期のリベラルアーツの姿はその後、2千年以上にわたるリベラルアーツの歴史のなかで独特の様相をもったラテンリベラルアーツとして切り分けてみることができよう。

リベラルアーツとはしばしば職業的技能を養う学びや教育とは別で、実用性から自由になった学芸という解釈がなされる。だが、この誕生の経緯をみれば、元来はそうともかぎらず、実学の諸々が、それこそソクラテス/プラトンが好んで用いる靴づくりの技術を数論や弁論と並べ語るような自由性をもって協和していた観がある。奴隷的技能といわれる技術知も、ローマの奴隷身分が解放される通路をもち、その解放奴隷が哲学者や偉大な軍人や政治家となって後世に名を残すような自由度があって、それがローマにおける特性のひとつであったことを合わせみれば、そのラテン的な実学を、知を愛し求める一線に連ねてしまう自由こそがもともとのリベラルアーツという概念の本懐ともいえそうである。

一方、本稿の問題対象であるセブンリベラルアーツは、少なくともその明白なカテゴリーとしては、辞書定義にみるような具合には、古代ギリシアの時代にもローマ帝国繁栄期にもまだ成立していなかったことがわかる。ただその7学科を構成する各学科目が部分的に、あるいは全体に包摂されるかたちで古代ギリシア以来、常々登場していたことはすでにあきらかである。

では、実学を含んだ総合学術として花開いたラテンリベラルアーツがその後、7科目に縮減、固定していった経緯はどのようなものだったのか。以下にその成り行きをみていく。

ラテンリベラルアーツのその後

医術や建築術がリベラルアーツの仲間入りをし得たのは、ギリシア由来の学環に学び、そのうえでそれぞれの道の達人となって哲学的思考をなし得た人物たちの手に成るところのものである。それはちょうどローマ帝政後半に、帝国のどこかで突然「われこそが新たなローマ皇帝なり」と僭称するところから戦いはじめて実際、皇帝になってしまうようなある種の実力主義的自由性のもとに学問があったということでもある。

したがって、そうしたラテンリベラルアーツにあっても、その一般性状を語るなら、雄弁家が政治的な意義をもってもはやされた共和政の時代を経たことや、法賢慮が重視されたこともあって、修辞(弁論)を前面に据えてその基礎としての文法(適切な読み書き)を強調する傾向があったことをとらえねばなら

ないだろう。ここには世界認識にあたって法則の発見による自然理解から、次第に人間自身や人間のつくり出すもの、しでかすこと、そのものがたりに関心が移行していったこととも軌を一にしている。

この趨勢は哲学においても例外ではなく、ギリシアの自然や形而上学に向かった関心どころは次第にストイシズムに代表されるような幸福に生きるための実践性に焦点が移動した。同時に、ローマの政治文化の中心圏では次第に理論面での学問の深まりが失われ、逆に帝国の周縁部において理論面での学的発展が担われていった。その周縁とは地理的な意味だけでなくローマ一般市民に対するキリスト教徒も指している。

ローマ帝国全盛期のキリスト教

少なくともローマ帝国最盛期の五賢帝が君臨した1～2世紀のあいだローマにおけるキリスト教の位置づけは東方の異教で、教徒は社会の周辺人であった。実際、キリスト教徒は都心部からかなり離れた一定の区画に集まって他の市民との公的な交わりを避けて暮らしていたようである。その一方で、周囲との緊張を能動的に回避する策をとりつづけた人たちもいた。たとえば、ローマが最高潮にあった時代を通して、キリスト教がヘレニズムの伝統に適うものであり、迫害の対象になる性質をもたないことを綴ったいくつもの護教論が盛んに書かれ、時の皇帝に献上されつづけていた。その効果が直接ローマ中枢にあらわれたことはなかったとしても、その動きはキリスト教徒が盛んにギリシア由来の学問を摂取し、パンとサーカスで繁栄の時を送っていたローマ一般市民の背後で知的に厚みを増していくことにつながったと思われる。

実際、当時、ギリシア由来の知とキリスト教との融合が活発になされた地は宗教的風土がローマよりも寛容で、しかもギリシアの知の遺産に厚かったアレクサンドリアであったようだ。その典型は教父クレメンス (Clemens) にみることができる。彼は2世紀後半の同地でリベラルアーツの歴史にとって分水界をなす仕事をなした。それは基本的には彼を遡ること約2世紀前にアレクサンドリアの哲人フィロン (Philo Judaeus) がおこなった旧約の解釈とギリシア由来の徳の実現としての哲学、その準備教育としての学環との関係づけの作業を、新約においておこなうというバージョン改訂ともいえる仕事であった¹⁰。クレメンスはその他にもキリスト教とギリシア思想、とくにプラトン哲学の融合に先鞭をつけたユスティノス (Ioustinos)、あるいはエジプトのパンタイノス (Pantainos) などの先駆者たちの仕事を統合しつつ、聖書解釈、信仰を説き明かす手段として哲学を重視し、弁証をもって信仰から覚知への移行を提示した。それは神学の礎石となり、その基礎教育にリベラルアーツをあてるという構造形成にもつながった。

ローマの変化

M. アウレリウスを最後とする五賢帝後、3世紀にかけてのローマは築きあげた資産を食い出すことになる。加えて度重なる伝染病の流行や飢饉、重税などに不満が募り各地で内乱が勃発する。外に目を向ければ周辺民族の絶え間ない侵入があり、その対策に追われる。その結果は3世紀、軍人皇帝による支配を導き、武を前面に出した執政に転化する。パクスロマーナの象徴ともいえた賢帝の「文」が後退し、ローマは次第に混迷と軍事的な統制の空気に満ちていく。自由学術が修辞を軸にその基礎としての文法と論理

の修養を旨とし、精神を自由に働かせていく学として、最も自然にそのあり方を謳歌した時代は過ぎ去った。

当時の軍人皇帝の代表格セウエルス（Septimius Severus）は教徒への迫害政策もとり、実際、その影響でアレクサンドリアのクレメンスは活動を封じられ、現在のトルコ東部、カッパドキア（Kappadokia）に逃避した。しかし、このハプニングは同地に彼の影響がもたらされることにつながり、あとでみるようにその後のリベラルアーツの展開に少なからぬ影響を与えることになる。また、彼の弟子で3世紀前半、アレクサンドリアで活躍した聖書解釈学者に、のちのアウグスティヌスと並び称される教父オリゲネス（Ōrigenēs）がいる。彼は新プラトン主義の思想とキリスト教を融合して神学を体系化した人だが、回心以前は文法の塾を開いていた。回心後は哲学的なアプローチをとってキリスト教を考察する仕事を推進し、信仰への道を開くための塾を運営した。その門弟がリベラルアーツ史に確かな足跡を残すことになる。

帝国のキリスト教徒弾圧が一層強硬にあらわれたのは、3世紀半ばに帝位についた軍人皇帝デキウス（Gaius Messius Quintus Decius）のときであった。弾圧の背景にはすでに無視できないほど教会の勢力が増してきて、それが帝国の統制力衰微に関わっていることが痛感できたためであろう。彼はローマ伝統の多神の祭儀を復興し、全帝国民に参加を命じた。だが、キリスト教徒がローマの神々の祭儀に参加するはずはなく、多数の殉教者が出た。教父オリゲネスも人生晩年にあったが、このとき投獄され、ややあって没している。

3世紀後半の帝国は周囲との関係で激動し、崩壊の危機に瀕していく。この時期、教徒以外の知識人階級はほとんど力を失ったようである。これに対して教徒知識人たちは哲学の限界を信仰のなかで乗り越えたり、そこに神学の基礎を築くなど思索に沈潜する仕事を積んでいた。その結果、3世紀後半には信念と財力においてのみならず、知力においても教会の勢力は確固としたものになり、病気や貧困といった日常生活の具体的な救済も含めて、教会に救いを求める市民が増していった。教会への信頼は帝国の斜陽と反比例して増していった。

4世紀への変わり目、ディオクレティアヌス帝（Valerius Diocletianus）がたち、長くつづいた軍人皇帝の時代が一時的に途切れた。皇帝は統治と防衛を効率化するため、帝国を東西に二分し、それぞれに正帝と副帝をおいて領土を四分統治する体制をとる。ただし、自らは最高権威を確保したから、自分が帝位にあるあいだは都合がよく効果があったようである。だが、この帝位分化がその後の皇帝間のとめどない争いを水路づけてしまう。その水脈は大きくはその後の東西分断と西方滅亡の流れを導くことになる。

また彼は統治策の一環としてローマ神の権威を高め、同時にローマ帝政史上最悪といわれるキリスト教弾圧をおこなった¹¹。教会の取り壊し、教徒集会の禁止、聖書の焚書はもちろんのこと、ローマの神々の祭儀に参加しない教徒の死刑や強制労働が相次いだ。この暴挙を同様に乱暴に裁断すればまさに手が付けられなくなった相手へのヒステリーであった。というのは、それからわずか10年後、その間に一時的には同時期に6人の皇帝が立つといった帝位混迷を経た末、東にガレリウス帝（Gaius Galerius）が立ち、西にコンスタンティヌス帝（Flavius Valerius Constantinus I）が立った4世紀のはじめに一転、キリスト教公認の勅令が出されたからである。その内容はどのような宗教でも、帝国の住人を恩恵と慈愛により和解と融和に導くかぎり信仰の自由を認めることがローマの政策に適うと記したものであった。少し前の大迫害が追いつめられた者のヒステリーであったとすれば、この突然の反転はほとんど統合失調した政策にさえみえる。そこには分派が数あれど、ひとつの神のもとに頑強なまとまりをみせる教徒に対して、ときの帝政はジェットコースタードラマさながらのめまぐるしい権力抗争を続け、日和見的に政策決定せ

ざるを得なかったという事情が映し出されている。

4世紀の帝国はひたすら東西分裂の方向を強め、同世紀の末に分離する。その直前、キリスト教はローマ国教に定められる。それに合するようにキリスト教会内でも東のコンスタンティノポリス教会（のちに東方正教会）と西のローマ教会（のちのローマカトリック教会）との対立構造があらわになっていく。その後のローマ帝国は西の衰亡が止まらず1世紀を待たずして滅亡する（488年）が、伴って生じた危機感もあってローマカトリック教会の勢力はあらわに強固さを増していく。

この約500年の帝国をめぐる歴史は帝政とキリスト教が見事に一對のグラディエーションを描きながら入れ替わる動態としてとらえることができる。それは帝国の戦いの拡張により、その基盤をもって成し遂げたユートピア的栄華が所詮は維持困難な構造のうえに成り立っていたことにより、比較的短期のうちにゆらぎ、その混迷と統制困難な焦りのなかで帝位をめぐる争いで内破していく一方があった。他方のキリスト教はその混乱のなかで、まだら発作的に生じる迫害はあっても「敵を愛し、迫害する者のために祈れ¹²」と語りつつ聖なる殉教を超えて信徒を増やし、またその一徹さは帝政への不安や不信と対照的に、安定と信仰の拠り所となって実質的に市民のこころを捉え生活を支えていった。

前述のとおり、3世紀以降の数百年間、帝国における教徒以外の知識人の影は薄くなった。ことに数学諸科にはほとんど進歩がみられず、三学についても修辞・雄弁は後退し、もっぱら文法がアーツの主脈となった。何人かの大文法家がラテン文法の精緻化や体系化に勤しみ、その典型は4世紀のドナトゥス（Donatus）による文法教科書“*Ars grammatica*”や、6世紀のプリスキアヌス（Priscian）の著作“*Institutiones grammaticae*”にみることができる。また、古代ローマの博物学者大プリニウス（Pliny the Elder）に由来すると思われる百科全書の著述家と称される人たちがギリシア由来の学知を要約的にまとめていく営みもみられた。だが、その内容はいずれも遺産の編集に留まった。ラテン的なりべラルアーツはすでに実学の基盤としての機能を失い、いわんや人間的完成に向けられたものでもなく、超俗界に向けての基礎階梯に置換されていった。そのリべラルアーツに生じた変容の様をみてみよう。

知を愛することは

4世紀中盤以降、キリスト教が帝国に公認されてからのち、その知脈は大きく2つに分かれて発展した。ひとつは聖書の字義的、史的解釈を重視したアンティオキア学派¹³の流れで、この派の教父クリュストモス（Chrysostomos）は帝国の新都コンスタンティノポリスで実践的な司牧をもって活躍し東方教会の礎石をつくった。もうひとつはクレメンスとその弟子オリゲネスのアレクサンドリア学派の系譜で、こちららは聖書解釈に比喻を駆使した修辞、霊的解釈、思弁的手法を特徴とした系統である。すでにみたようにその手法によりヘレニズムの知の遺産、近くは新プラトン主義の知慮をキリスト教体系のなかに導入し、ローマ衰退とともにあらわれはじめる超俗的な思潮形成に寄与した。

クレメンス、オリゲネスの系譜はキリスト教が公認されてのち「カッパドキアの三つの光」と称される教父たちを生み出す。すなわち新プラトン主義のプロティノスの哲学を一層キリスト教へと引き入れたバシレイオス（Basileios）、その朋友であるナジアンゾス（Nazianzos）のグレゴリオス（Gregorios）、およびバシレイオスの弟ニュッサ（Nyssa）のグレゴリオス（Gregorios）の3人である。彼らはいずれも若いときはアテナイやアレクサンドリアでギリシア由来の学問を学んでいる。

彼らのうち、キリスト教の根幹をなすドグマ、三位一体の教義の確立に大きく関わったニュッサのグレ

ゴリオスは、知を愛すること philo-sophia の sophia は同時にイエス=キリストでもあるという解釈を提起する。人は神の愛の対象である。よって人は神の愛に目覚めることで自分のなかの豊かさに気づいていく。それはひたすら外に知識を求めるような知ではなく、自分の内部に沈潜していく知である。そのように知を愛し、身につけることはすなわちイエスをみずからの内に受肉することに等しいとする。「子どもを愛することは神を愛することである」とか「真の師は内なるキリストのみ」といった表現は他方のアンティオキア学派のクリュソストモスなどにもみられるが、知を愛することを神への愛の覚醒とすることは画期的な解釈であった。これにより、人間理解へ向かおうとする理性をイエスの神性と寄合わせ、神が創造した徳性的な人間を知ることに向け変える方が編み出された。ギリシア由来の自由人の知、その愛をイエス=キリストへの愛と重ね描きする知慮により、ギリシア—ヘレニズムの学知はカトリックの体系のもとに包摂されていく。

ネオプラトニズムとキリスト教の同化に大きな役割を担った人物としてもう一人、同じ4～5世紀に生きた教父アウグスティヌス (Aurelius Augustinus) の存在を忘れることはできない。彼はリベラルアーツの体系化にはほとんど関わりが認められないが、もともと異教徒の学問といわれるそれらの価値ははっきりと認めていた¹⁴。彼が生まれ育ったのはこんにちのアルジェリア、当時はカルタゴとして栄えた地であり、すでにローマの文化が浸透していた時期であった。著作『告白』には学校で読み書きの初等科目を鞭打たれながら難儀して学んだ経験なども綴られている。青年期の彼は苦しみつつもとくに文法と弁論に傾注したようで、20代ではそれらを教える役についている。また、キケロの著作によって哲学に開眼したことも記されている。

『告白』の後半では、プラトンが『メノン』などを中心に展開した知識の想起説に着想を得たと思われるアイデアや『テアイテトス』で検討された「ところがそれ自身で知ること」などへの再考が展開される。そのうえで、プラトンのアイデア界を人間の内に住む神の似姿、不変の神の力としての永遠の真理として捉え直すに至る。たとえば、アウグスティヌスはことばがもつメディアとしての役割をわきまえ、それを受け取る人間はすでにことば以上の洞察が得られているとみる。その洞察ゆえに、人はことばをもとにした意味を多様に開花させうる。この意味の創造や多様化は外から他者が教えることはできない。しばしば教育はそのように教える行為であると思われる。だが、教育にできることは教えを受ける当人にその内にある洞察力を刺激することであるとする。その洞察こそは真理の光、すなわちイエスが内的にその人に語りかけることばであり、それを促す教育行為とはそのことばを傾聴するよう導くことだという具合になる。ここに信仰と知の両立が果たされる。この見解は長きにわたる西欧中世の知脈に多大な影響を及ぼしていくことになる。

自由七科のイニシアティブ

実学を加えパクス・コンソルティスを成したラテンリベラルアーツが花咲いた時代から500年の時が流れていた。異教ゆえに長くギリシア語のままであった聖書はいまや国教となってラテン語訳が普及し、読み書き計算の初等教育から徐々に学びを進めていくプロセスの先には聖職者に至るキャリアパスが成立し、聡明な知によってそれが競われるようになっていた。そのようななか西ローマ帝国滅亡直後の5世紀末、百科全書の著述家のひとり、マルティアヌス・カペラ (Martianus Minneus Felix Capella) の書『メリクリウスとフィロロギアの結婚、そしてセブンリベラルアーツ9分冊 (De nuptiis Philologiae et

Mercurii et de septem artibus liberalibus libri novem)』が登場する。

カペラの書はその名のとおり新郎メリクリウス（マーキュリー、雄弁の神）がアポロの媒酌によって新婦フィロロギア（ことばを愛する者、文献学）と結婚するという寓話であった¹⁵。その式で新郎は新婦に7人の侍女を贈る。その侍女たちは文法、修辞、論理、数論、幾何、天文、音楽の7人で、各人が祝辞を述べつつ自己紹介するという趣向になっている（9分冊のうちはじめ2冊が情景描写、後半7冊を七科それぞれにあてている。分冊といっても量としては通常の書籍の1章相当）。ここに今日、しばしば自由七科と呼ばれるリベラルアーツ7つの構成が具体的に示されたわけである。

この結婚式には建築術と医術も列席している。これはキケロが『義務について』でも述べているように、建築や医術が使用人身分のなかでも高度の英知をもつ者が受けもつ職人術と認められており、山海の珍味を扱う商人や踊り子、香水屋といった職業人とは一線が画され、その技術はリベラルアーツと同列にあつてふさわしいとみられていた¹⁶ことを反映しているのだろう。ただ、カペラの書でこの2者は身分をわきまえてだろうか、終始押し黙ったままの存在として扱われ、暗に7人の侍女とわけ隔てられている。

ラテンリベラルアーツにあつては実学称揚のなかで、数学諸科が応用面で活かされ、建築術や医術はリベラルアーツの第一線にあつた。だが、帝国が傾き、替わってキリスト教文化が浸透する時期にあわせ建築も医術も再び職人芸の世界に退いた。数学諸科の応用的側面も後退し、むしろそれらは精神世界の観照において宇宙の秩序や全体性を認識することや、さらには象徴世界の理解や神秘主義との相性もあつて占星術や錬金術の方向に潜勢していく流れが導かれていった。

カペラのこの書は表面的にはキリスト教のもとでの文化形成という色彩が強くなった当時の学問状況を伝える戯画的な寓喩である。だが、史的影響力という点でみると、その存在はこのほか大きな意味をもったようである。彼にどれほどの意図があつたかはわからないが、そこに規定された7つの学科構成はいわく言い難い堅牢な象徴的意味を携えてラテンリベラルアーツの終焉と、替わってキリスト教の呪縛を負ったセブンリベラルアーツの誕生を宣することになった。

セブンリベラルアーツの確立と呪縛

5世紀後半の西ローマ帝国滅亡は教会に聖職者の育成強化と教義の徹底を促した。5～6世紀頃から修道院体制が整備され、本格的な教会付置学校が次々とできるようになるが、その背景にはこうした社会変動の影響もあつた。

この時期に修道院組織が明確な会則を設けて体制強化を進めた典型例といえばベネディクトス（Benedictus）によるベネディクト修道会がある。また同時期、同じように、南イタリアに修道院学校を創設し修道院教育の体系化を先駆した人物にカッシオドルス（Flavius Magnus Aurelius Cassiodorus）¹⁷がいる。彼はもともと西ローマ帝国後の覇者、東ゴート王国の政治家であつたが、引退後に長く構想していた本格的な図書館付きの修道院学校を開いた。

その彼が成したもうひとつの大きな業績が2巻構成の『聖学ならびに世俗的諸学綱要』であつた。ここで自由学芸を世俗的と表現したのは聖学の超俗性に相対してのことである。この書物はあらためて7学科から成るリベラルアーツの規定を明確にした。その第1巻はタイトルにある聖学に相当し、聖書研究の方法が述べられている。この巻構成には他の学問に対する聖学＝神学の別格性があらわされている。もう1巻には聖学にいたるための予備学として世俗的諸学、すなわちセブンリベラルアーツが紹介されている。

ただし、七学科のうち文法、修辞、論理の三学は実用の学であり、適切に書き語り、説得力のある表現をし、明晰に考えるための言論術で、ゆえにあらゆる学のための基礎であるとする。もっともこれらも決して同列のものではなかった。すでに触れたように三学のなかでも文法は最も遅れて自由科として同定されたが、中世期にかけての教育では中軸に据えられ、まず文法を学び、そののち修辞と論理を学ぶ階梯が一般的になった。著作のなかではこれら三学のことを順に説明し、残りの四科の説明に入る手前のところで、つぎのようにまとめている。

「こうして自由学芸に関し、教育を受けていない人にとって有用であるとわれわれが判断した限りにおいて、おそらくすべてのことが語られたので、あなたがたはいわば開かれた扉を通して諸学科の端緒へと熱心に近づくことになる^{18]}

あきらかにカッシオドルスはすでにカペラがセブンリベラルアーツの各々を学科と称していたのに対し、やや別の観点を提起している。この点はほとんどポーカーフェイスの趣で、つぎのように名指しで記している。

「カペラが諸学科の抜粋を著したことを聞いている。だが、それは今に至るまでわれわれの手元に届いていない。それがない以上、よりよいのは、それをあなたがたに勧めるのではなく、学びたいと望む人々に不十分ではあるけれども本書をただちに提示することであろう^{19]}

そのように語ったうえで、残りの数論、幾何、天文、音楽の四科は三学と異質な数学諸科 (mathematica) であって、抽象的な量について考察する理論として観想的な哲学の一分野になっているとつづけている。

もうひとり、カッシオドルスと同時期、やはり東ゴート王国で政治家にして哲学者として活躍した人物にボエティウス (Anicius Manlius Severinus Boethius)^{20]}がいる。彼もその著『三位一体論』などで同様の自由学科の学問分類をおこなっている^{21]}。ボエティウスはプラトンを敬愛し学んだことで知られており、学問分類にはあきらかにその影響が反映されている。つまり、カッシオドルスと同様、セブンリベラルアーツのなかでも四科は基礎学としての三学と並ぶというよりも別のカテゴリーに属するとみたのである。その見方の背景には、キリスト教と学問の接続によって神、天界や超越、魂、それらの関係や秩序といった課題を扱ううえで天文を含む数学四科のありようが形而上学的な意味や象徴との関連を解くものとして位置づけられるようになったことがあげられる。

以上のように、ボエティウスもカッシオドルスもあえてセブンリベラルアーツということばでまとめるいい方は避けているが、同じ内容の7つの学を列挙し説明することには何のためらいもなかった。その背景には世俗の学という括りで、7という数をもってこれらをまとめることの便益があったと思われる。たとえば、カッシオドルスは著作のなかで、7という数字が聖書のいたるところで持続や永遠を象徴していることに触れている。

「この七という数は、次々と継起する七日ずつの日によって継続的に巡り来たり、常に全世界の終わりに向かって伸びていく… (中略) …神の業は数においてなされた^{22]}」。

むろんこうした語りには『創世記』における神の天地創造が7日目に創作の業の休日をもって終わることが踏まえられている^{23]}。聖学を下支えする教育プログラムにこうした象徴を付したリベラルアーツを組み込むことが都合のよいことであったことはいうまでもない。

ところで、もともとリベラルアーツの淵源にある力、その自由性はキリスト教内部では信仰に対する攪乱要因として疎まれていた^{24]}。たとえば、田子は当時のリベラルな学に対する教会の受容姿勢について次

のように書いている。

「当時、一方では厳格な修道士たちが異端の素として世俗的・古典的教養に対して激しい非難と攻撃を浴びせていた²⁵⁾」

これに対して、カッシオドルスらの構想はリベラルアーツを忌避することで、教会教養とは別の場で自由人たちの学芸が営まれていくような事態や、自由人たちの学知のラテン語訳が無軌道に出回るような厄介なことが起きてしまうよりも、むしろそれらを反動形式的に取り入れ、聖書理解のための前提、基礎学としてはっきりと構造化してしまう方が得策とみたのだろう²⁶⁾。

またすでに述べたように、カッシオドルスには修道院での教育を実践的に体系づけていく構想があった。そのためには理念の明快な科目構成の範型をつくりあげることも大事な仕事であった。そこで何よりも聖学として聖書を中心に据え、その理解を学の中軸にして、そのうえでギリシア・ローマ以来、培われてきた諸学としてリベラルアーツを捉え、これらを世俗の学として聖学に至る階梯に置こうとしたわけである。

ともかく、こうして現代に至るまで「リベラルアーツ、いわゆる自由七科」と書き、説明される範型の史的呪縛が西欧中世の黎明期、6世紀の初頭に始まった。その背景には、わたしたち人間のところに普遍的に備わる自由に対する憧憬と不安という両価的心情を根にして、それに対する緊張感と警戒感からこれを堅固な学問体系の内部に囲う計らいがあった。信仰を離れた自由な知は神のおさめする静態的な世界の下にあって、入門期の経過域ないしは通過儀礼前の世界として下位構造化する体制を組んだのである。だがそれゆえに、自由な知がその根底にもつ無制約の世界認識に向けての彷徨と冒険心は慎ましく固定的な宇宙観に対し大なる葛藤を抱き、みずからエネルギーを備給し、その発露を求めていくことになる。だから、視点を換えれば、このことは知ることと信じることをめぐる人間の飽くなき追求の原動力の蓄積に寄与する構造化であったとみることもできる。

カッシオドルスの仕事によって、以後、その写本は格好の学問ガイドとして中世西欧のラテン語世界に徐々に広まっていったようである。ただし、田子²⁵⁾によればその『綱要』2巻は意図に反して組み合わせで広まったというよりも、それぞれの巻が独立して流布し読まれた形跡があるという。おそらく第1巻は教会付置学校や修道院での教科書として、第2巻はやがて教会とは別の空間から興る大学のような場にも広まったにちがいない。

その後、少なくとも200年、学問的にはとりたてて創造的な発展がみられず、文法学者の研究が主流をなしながらセブンリベラルアーツが学問の基盤として安定化していく。なかでも8～9世紀にかけてのフランク王カール大帝によるカロリングルネサンス期には政策的な学問振興がなされ、セブンリベラルアーツはあらゆる学問に至るための教育の根幹として確固とした位置づけを得ることになる。だが、一方でそれは形式化と固定化を意味するものでもあった。やがてその先には本格的なルネサンス運動の高まりと大学の誕生が絡んでくるが、そこにおいてもまたリベラルアーツにはそれが宣する自由性とは相容れない別の網が宿命のように被されていくことになる。それについては機会を改めたい。

註

- 1 たとえば『広辞苑(第6版:2008)』を引くと「リベラルアーツ」は「①自由学芸に同じ(ちなみに第5版では「自由科に同じ」であった)②自由な心や批判的知性の育成、また自己覚醒を目的とした大学の教養教育の課程(第5版では「日本の新制大学の教養課程で行われる一般教養を目的とした教

- 科]であった)とある。その「自由学芸」の定義は「ギリシア・ローマ時代からルネサンスにかけて一般教養を目的とした諸学科。すなわち文法・修辞学・論理学(弁証法)の三学および算術・幾何学・天文学・音楽の四科の七学科。自由七科」とされている。
- 2 自由四科(quadrivium)を構成する算術、幾何、天文、音楽の連関を主題にしたのは「万物は数である」としたピュタゴラスであった。だから、彼自身はそれを特段、自由と結びつけはしなかったようだが、リベラルアーツのシーズをたずねれば紀元前6世紀にまで遡ることができる。これらを自由人の知と結びつけた代表者といえは続く世紀のソクラテス/プラトンであった。『テアイテトス』にいわく「自由人とは奴隷や家来とは違い、知を愛し自由の追求について鍛えてきた人たち」、その自由人が国の守護者になるべく『国家』で紹介した青年期教育の前奏曲プログラムとして紹介した内容は自由四科であった。
 - 3 enkukliosというギリシアのことばは円環とか完全、あるいは特殊に対する一般とか普通という意味をもつ。また、paideiaには教育、ことに青年教育、あるいは文化形成の意味がある。paideiaのpaisは「青年期を含めた広い意味の子ども」の養育や躾という意味をもつことから、特定の目的をもった職業訓練的な教育とは異なる人間的な養いの含意をもつ。よってこの学環は一定の完結性を宿した科目による全人教育をあらわすと同時に、その意味での普通教育、一般教育をあらわすことばになる。
 - 4 三学のひとつとなる文法はプラトンやアリストテレスの段階では学ぶべきものとしてとりあげられなかった。文法への着目はその後のストア派においてなされ、とくにB.C. 2世紀頃トルコのペルガモンに文法学校を開き、のちにローマに招かれたCratesが文法を講じ、体系化したことの影響が大きかったようである(Wagner, D.L. 1983 *The Seven Liberal Arts and Classical Scholarship*. In D.L.Wagner (Ed.) "The Seven Liberal Arts in the Middle Ages" Indiana University Press)。キケロのいう文法(grammaticis)とは幅が広く、たとえば『弁証家について(Cicero, M.T. *De Oratore*. 大西英文訳 1999『キケロー選集7』岩波書店)』ではその内容として詩人研究、歴史認識、ことばの解釈、発音の抑揚などと例示されている。
 - 5 12世紀の哲学者テオドリクスの記述(Theodoricus (Thierry of Chartres) *Eptatheucon*.井澤清訳 2002『ヘプタテウコン(七自由学芸の書)』上智大学中世思想研究所 2002『中世思想原典集成8』平凡社)による。ヴァロの同書はのちに示すカペラの書の礎石になったといわれ(前の註のWagnerの文献)、訳語として『自由学科論』などとも呼ばれることがある(小林雅夫 2005『古代ローマの人々』早稲田大学)。
 - 6 この引用はBrainyMedia.comのBrainyQuoteによる。なお、カリス3女神はAglaiā(輝き)、Euphrosyne(喜び)、Thalia(花の盛り)。ムーサ9女神はCalliope(叙事詩)、Clio(歴史)、Euterpe(抒情詩)、Thalia(喜劇[カリスと同名])、Melpomene(悲劇)、Terpsichore(舞踊)、Erato(恋愛抒情詩)、Polyhymnia(賛歌)、Urania(天文)。
 - 7 のちに取りあげるカッシオドルスによれば、ヴァロは「弁証(論理)と弁論(修辞学)は人間の手に例えれば、握った手と開いた手である」という名言を残したという。弁証は議論を端的に圧縮することであり、弁論は反対に言葉を尽くして議論を広げていくことだからと説明がある。
 - 8 Vitruvius "De architectura libri decem" 森田優一訳 1969『ウィトルーウィウス建築書』東海大学出版会から。
 - 9 医術や建築術が自由諸科とともにあったことはのちに述べるカペラによる"De nuptiis Philologiae

- et Mercurii et de septem artibus liberalibus libri novem”の記述からも推察できる。
- 10 改訂とはいえ、Daniélou, J. (1963 *The Cristian Centuries 1*. 上智大学中世思想研究所編訳 1996『キリスト教史Ⅰ』平凡社)の表現に借りれば、それは「ユダヤ教の衣装は死んだ皮膚のように剥落した」ものとなり「キリスト教のうちに、ギリシアの賢者たちによって約束された理想が実現」されたフルモデルチェンジであった。
 - 11 H. I. Marrou (1963 *The Cristian Centuries 2*. 上智大学中世思想研究所編訳 1996『キリスト教史Ⅱ』平凡社)は、この迫害についてたとえば殉教者数に関しては「現代の集団的大量虐殺による何百万という犠牲に比較することはもとよりできない」としても「その組織的な性格と範囲の広さからみて、迫害劇の山場たることを失わない」としている。
 - 12 「マタイ伝福音書」5章44より。
 - 13 アンティオキア (Antiochia) は現在のトルコ南部の都市アンタキヤの古称。この時代は商業都市として栄えた。パレスチナ外で初めてキリスト教団ができた場所でもある。学派の伝統的な特徴は文法や論理の重視で思弁、寓意を避ける点でアレクサンドリア学派と対照的である。
 - 14 たとえば、A. Augustinus (396-428? *Corpus Christianorum Series Latina, XXXII; Corpus Scriptorum Ecclesiasticorum Latinorum, LXXX*. 加藤武訳 1988『アウグスティヌス著作集6:キリスト教の教え』教文館)には「真理のために用いるのがふさわしい自由学芸…(略)…はいわば彼ら(異教徒)の金銀である…(略)…(これらは)いたるところに注がれている神の摂理といういわば鉱山から発掘した(ものだから)…(略)…福音を述べ伝えるという正しい目的のために用いなくてはならない」と述べ、とくに論理学、弁論術、文体、数学については独立の章を設けて説明している。また、山川明子(2005「アウグスティヌスにおけるリベラル・アーツ観」*人間文化論叢*, 8, 135-143)よれば、彼は教育において、とくに世界認識における全体性の秩序を知るために数学四科を学ぶことが欠かせないことも強調していたようである。
 - 15 井澤(2002『ヘプタテウコン』の解説 上智大学中世思想研究所 2002『中世思想原典集成8』平凡社)によれば、雄弁の神メリクリウスと文献学フィロロギアの結婚というモチーフは、もともとケケロの思想に由来しているという。たとえば、それはCicero (*De Inventione*. 片山英男訳 2000「発想論」片山英男訳『ケケロー選集6』岩波書店)の次のような記述を指していよう。「雄弁の伴わぬ知恵が共同体の役に立つことは無いが、逆に知恵の伴わぬ雄弁も害を与えること甚だしいだけで、決して何の役にも立たない。従って、学問と道徳に真剣で高潔な関心を寄せることなく、ひたすら全ての努力を弁論の鍛錬に向ける者は、自分自身にも役に立たないばかりか、祖国にとって有害な人物にしかならない。それに対して、祖国の利益を阻害するのではなく、祖国の利益の為に戦う手段として弁論で武装する市民こそ、自身にとっても全体にとっても最も有益で最も好ましい市民となるだろう(Cicero, 『発想論』)」
 - 16 Cicero, M.T. *De Officiis*. 高橋宏幸訳 1999「義務について」中務哲郎・高橋宏幸訳『ケケロー選集9』岩波書店より。
 - 17 カッシオドルスははじめてラテン語による聖書全巻をまとめた人ともいわれている。そのアミアティヌス写本(Codex Amiatinus)はフィレンツェのローレンティア図書館に現存している。
 - 18 Cassiodorus, F.M.A. “*Institutiones; Institutiones divinarum et humanarum lectionum; Institutiones divinarum et saecularium litterarum*” 田子多津子訳 1993『綱要』上智大学中世思

想研究所 1993『中世思想原典集成5』平凡社より。

19 同上

20 ボエティウスは自身の語りから彼がプラトンとアリストテレス全著作のラテン語訳を制作する構想をもっていたことがわかる。その仕事が成就したのは先に手をつけたためだろうか、アリストテレスの『カテゴリー論』や『命題論』などから成るいわゆる『オルガヌム』であった。その他、四科それぞれの概論も書いており、音楽と数論のそれが現在に伝わっている。第一線の政治家として腕を振るいながら学問の業績をあげ、後者に捧げる時間が足りないという嘆きを書き残している彼だが、最期は反逆罪で投獄されるに至る。その一千年後に『ノヴム・オルガヌム』を著したFベーコンが似た境涯にあったことは興味深い話である。

21 Boethius, A.M.S. Quomodo Trinitas unus Deus ac non tres Dii. 坂口ふみ訳 1993『三位一体論』上智大学中世思想研究所 1993『中世思想原典集成5』平凡社。

22 註18に同じ

23 また、旧約『箴言』の第9章冒頭にはつぎのような記述がある。「知恵は自分の家を建て、七本の柱を刻んで立てた」。知恵はその家に思慮に欠けた者たちを呼び寄せて、パンや秘密のワインをふるまうて理への道に向かわせたのであった。

24 中世西欧においてアリストテレスの著作のラテン語への翻訳は盛んになされ出回った。それに対して、自由人の知を語るプラトンの翻訳はギリシア文学とともになかなか流通しなかった。これはヘレニズム・古代ローマにおけるプラトン思想を基盤にした知の状況とはかなり異なる様相である。たとえば12世紀の時点でもプラトンのラテン語翻訳は『ティマイオス』断片と『メノン』『パイドーン』だけであったという (Verger, J. 1973 Les Universités au Moyen Age. P.U.F. 大高順雄訳 1979『中世の大学』みすず書房)。理由は著作そのものが発見されなかったためとされているが、教会筋が翻訳 (写本) 流通を抑制していたこともあっただろう。

25 田子多津子 1993『綱要』の解説 上智大学中世思想研究所 1993『中世思想原典集成5』平凡社より。

26 この方略はカッシオドルスが『聖学ならびに世俗的諸学綱要 (註18)』の序言冒頭で述べている次の著述動機からもうかがい知ることができる。

「学校が世俗の学問への大いなる欲求で熱気を帯び、人びとの多くが学校を通して世界についての知識に到達できると信じているのを知り、また世俗の著述家たちについては豊富にしかもみごとに教えられているのを見るにつけ、私は聖書の公的な教師が欠けていることに深い悲しみを覚えた… (中略) …そのため私は神の愛によって、教師の代わりに主の導きの下で、あなたがたのためにこの入門的な書物を作り上げることへと駆り立てられた。本書を通して、聖書の一連のつながりと世俗の学問に関する簡略な知識が神の恵みによって語られるだろう」